

オーストラリアにおける米産業の動向

佐々木 緑*・堤 純**・磯野 巧***・永田 成文***

*広島修道大学人間環境学部, **筑波大学生命環境系, ***三重大学教育学部

本稿は、これまであまり着目されてこなかったオーストラリアにおける米産業の動向を明らかにすることを目的とした。また、同国米産業を題材としたESDのあり方を検討した。オーストラリア国内での米の経済的インパクトは小さいものの、米は同国の輸出用作物として栽培されてきた。灌漑地域の形成とともに入植が開始されて商業的米生産が始まり、同国の米生産はほぼNSW州の灌漑地域で行われていた。そこでは水利用制限の下、輪作の導入など環境に配慮しつつ高収量品種を導入することで合理的、かつ大規模にビジネスとしての稲作が展開していた。近年は干ばつによる水制限のため、市場価格が伸びている作物への転換がみられるなど米農家数が大きく変動していることが明らかとなった。オーストラリアにおける米産業の動向は水利用の視点からESDに活用でき、本研究の結果は資料的価値が高いものといえる。

キーワード：米産業、灌漑農業、リベリナ地方、NSW州、オーストラリア、ESD

I はじめに

近年、大きく議論を巻き起こしてきた通称TPP（環太平洋パートナーシップ）協定問題は2018年オーストラリアと日本を含め11か国で署名式が行われた。日本がこれまで死守してきた米への関税は基本的に現行を維持するものの、オーストラリアに対しては無関税の輸入枠を設けることになっている。おりしも、2018年から日本では減反政策の撤廃という施策の大転換が行われており、国際競争力のある米作りが推進されている。日本とオーストラリアの貿易における米の取引量や金額は他作物に比較すればわずかであるが、日本にとって貿易におけるオーストラリアの重要度は必ずしも低くはない。そもそも、米は他の穀物に比較して生産に占める貿易割合が低い。日本の商業用米の輸出货量および金額は年々増加傾向で、オーストラリア向けは全体の4%、香港、シンガポール、台湾、アメリカ合衆国、イギリスに続く第6位の地位にある（2017年）¹⁾。オーストラリアでは外食産業で米需要が高まっており、日本から

の輸出は前年比33%増となっている。オーストラリアは近年、15万t前後の米を輸入しており、同国にとって日本は全体のわずか0.5%の輸入量で第10位（2015年）の米の輸入相手国である（日本貿易振興機構、2017）。日本から輸出される米は短粒種であるが、オーストラリア国内では短粒種米は価格が高く需要も限定的であるため、日本食レストラン等の外食産業では主にカリフォルニア産（カルローズ）や国産の中粒種が使用されている。オーストラリア国内の流通で最も多いのは廉価でニーズの高い長粒種である。

一方、日本は1993年にGATTウルグアイラウンドに合意し、1995年からMA（ミニマムアクセス）米を受け入れてきた。その当初から2017年現在まで継続して1万t（玄米ベース）以上²⁾の米を日本に輸出しているのはアメリカ合衆国、タイ、オーストラリア、中国の4か国のみである。ここ9年の日本でのMA米の受け入れ量は76.7tで、2017年実績で見るとその内訳はアメリカ合衆国47.6%、タイ34.4%、オーストラリア9.7%、中国7.3%となっており、4か国で99%を占める³⁾。